

(「ごめん下さい。大谷さん」

こんどは、ちょっと鋭い語調でした。同時に、玄関のあく音がして、

(「大谷さん！ いらっしゃるんでしょう？」

と、はっきり怒っている声で言うのが聞えました。

夫は、その時やっと玄関に出た様子で、

(「なんだい」

と、ひどくおどおどしているような、まの抜けた返辭をいたしました。

(「なんだいではありませんよ」

と女は、声をひそめて言い、

(「こんな、ちゃんとしたお家もあるくせに、どろぼうを働くなんで、どうした事です。ひとのわるい冗談はよして、あれを返して下さい。でなければ、私はこれからすぐ警察に訴えます」

(「何を言うんだ。失敬な事を言うな。ここは、お前たちの来るところでは無い。帰れ！ 帰らなければ、僕のほうからお前たちを訴えてやる」
その時、もうひとりの男の声が出ました。

(「先生、いい度胸だね。お前たちの来るところではない、とは出かした。呆あきれてものが言えねえや。他の事とは違う。よその家の金を、あんた、冗談にも程度がありますよ。いままでだって、私たち夫婦は、あんたのために、どれだけ苦勞をさせられて来たか、わからねえのだ。それなのに、こんな、今夜のような情ねえ事をし出かしてくれる。先生、私は見そこないましたよ」

(「ゆすりだ」

と夫は、威だけ高に言うのですが、その声は震えていました。

(「恐喝だ。帰れ！ 文句があるなら、あした聞く」

(「たいへんな事を言いやがるなあ、先生、すっかりもう一人前の悪党だ。それではもう警察へお願いするより手がねえぜ」

その言葉の響きには、私の全身鳥肌立ったほどの凄すごい憎惡がこもっていました。

夫（大谷）

女

男（もうひとりの男）